

## 平成 28 年度 学術振興基金助成による成果報告書

平成 28 年 8 月 22 日

学 長 殿

所属部局・職名 人間発達文化学類・准教授

申 請 者 名 水澤 玲子

助成事業の区分 (該当するものに○印)	研究協力に関する事業 (学術出版・叢書・学会等運営・ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">学会参加</span> ) 学術振興に関する事業 (学生・事務職員・その他の特別事業)
事 業 名	平成 28 年度学術振興基金助成事業 (②海外学会参加助成)
事業実施期間	平成 28 年 7 月 ~ 平成 28 年 7 月
成 果 の 概 要	<p>平成 28 年 7 月 19 日から 23 日にかけて、ポルトガル領アゾレス諸島テルセイラ島において開催された国際学会「Island Biology 2016」に出席した。隔年開催される本学会は、島嶼生態学に焦点を当てた世界で唯一の学会であり、世界中の島嶼生態学者が一堂に会して意見交換を行う貴重な場となっている。</p> <p>筆者は、長谷川雅美教授（東邦大）及び阿部晴恵助教（新潟大）の主催する Special Symposium “Biogeography of species interactions in the Japanese Izu Islands” において研究発表を行った。申請者の研究発表は、日本産広義クサギに含まれる四つの分類群について、倍数性と遺伝的組成の相関を調べたもので、核系統樹と葉緑体系統樹のトポロジー比較から、広義クサギ内部における過去の交雑が示唆された。この結果から推測される一つの可能性として、現生の四倍体系統であるクサギとアマクサギは複数の二倍体系統の交雑によって生じた異質二倍体であり、現生の二倍体系統であるシマクサギとショウロクサギは原始的な二倍体系統の生き残り（遺存系統）であることが考えられる。今後は次世代シーケンサーを用いた詳細な解析によって、島嶼環境におけるクサギ属植物の種分化過程に、交雑が及ぼした影響を明らかにしていく予定である。</p> <p>島の固有種が過去に交雑を経験した可能性を示唆する結果は、海外の研究者による発表の中にも見出された。かつては、島の生物は大陸から隔離されたために独自の進化を遂げたと解釈されてきたが、遺伝解析が普及したことで、島における種分化過程における交雑の影響は、これまで考えられてきたよりも大きいことが明らかになりつつある。本学会に出席したことで、「交雑」が島嶼生態学のトレンドになりつつあることを、肌で感じる事が出来た。</p>